

【2017年度 国内機関長賞】JICA北陸支部長賞 私の考える国際援助の在り方

富山県立高岡高等学校 二年 六渡 愛由

「国際援助」と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。お金を寄付すること、食料を届けること、それとも学校をつくること。私が今パッと思いついたのはこのくらい。でも、ここはもう少し深く考えてみることにしよう。

まず「お金を寄付すること」。お金を寄付すれば貧困に苦しむ人々の生活は少しは楽になるだろう。いや、ちょっと待った。お金を実際に受け取るのは貧困に苦しむ人々ではなくその指導者の立場である政府関係の人々なのではないか。そうなると、私たちが寄付したお金は貧困に苦しむ人々のために使われるとは限らない。また、お金は使えばすぐになくなる。だったらお金を使い切った後はまた、お金を寄付するのか。それはきりが無い。このように考えてみると、「お金を寄付すること」は「国際援助」とは言えないかもしれない。

次に、「食料を届けること」。これも先ほど述べたように、ただ食料を届けるだけでは、一時的な支援にすぎない。食料も消費すればなくなるのだから。とすると、「食料そのもの」ではなくその「食料を作る技術」を届ける必要があるだろう。

そして「学校をつくること」。これまで述べた二つと違い、学校は使ってもなくならない。うん、大丈夫そう。でももう少し考える。私の住む日本の子供は皆、学校に通っていてそれは当たり前のこと。その「当たり前」は他の国ではどうなのだろう。学校のない場所に住む人々にはそもそも、子供は学校に行くという習慣がない。子供も一家の大事な働き手だ。そのような場所に学校をつくっても、親は子供を学校に行かせないだろう。ただ学校をつくるのではなく、現地の人々に学校で学ぶことの重要性を知ってもらうことから始めなければならない。

今年の夏、ある大学のオープンキャンパスに参加した。そこで受けた模擬授業で大学の先生がしてくださったお話が心に残っている。——その先生はアフリカのシエラレオネという国で国際援助活動を行っていた。シエラレオネは世界最貧困と呼ばれるほど貧しい国で、子供の死亡率が高い。下痢に苦しむ子供が多く、トイレがないからウイルスに感染

してしまうのだ。そこで、清潔なトイレを建設しようと試みた。しかし根本的にシエラレオネではトイレで排泄をするという習慣がない。まずその習慣をシエラレオネ全体に浸透させなければならない。人々の習慣を変えることは難しく、時間のかかることだ。——このような内容であった。私はこのお話を聞いて、国際援助とは必ずしも物質的な支援なのではなく、むしろ人々の生活の質を向上させるための習慣を確立することなのだと考えた。

そして、忘れてはいけないのが国際援助を「してあげる」という意識を捨てることである。国際援助に上と下という関係をつくってしまえば本当の援助にはならないと思う。こちらの一方的な援助は、ただの自己満足になりかねないからだ。互いの足りない部分を補完し合う「困ったときはお互いさま」の意識で国際援助を行うべきだと考える。

物資を届けるだけでなく、それをつくる技術を伝える。施設をつくるだけでなく、その施設を使う習慣を浸透させる。現地の人々が本当に望んでいることを把握し、決して我々の自己満足に終わってはならない。

これが、高校二年の夏休み、このエッセイを書きながら私が考えた国際援助の在り方。私は将来、何らかの形で国際援助活動に関わりたい。三年前に訪れたペルーで、私は初めてストリートチルドレンを見た。彼らの姿を思い出すと胸が痛む。いつか私でも彼らのために何かできる日が来るかもしれない。そう信じて今は勉強し自分の視野を広げたい。視野が広がると考え方も変わる。その都度、自分なりの「国際援助の在り方」を考えるつもりだ。

